

山村暮鳥に「風景 純銀もぎいく」という詩がある。

いちめんのなのはな いちめんのなのはな
 かすかなるむぎぶえ ひばりのおしやべり
 いちめんのなのはな いちめんのなのはな

第3連は省略したが、すべてひらがなで書かれていて、各連が9行9文字で、8行目に「かすかなるむぎぶえ」「ひばりのおしやべり」「やめるはひるのつき」と、「いちめんのなのはな」と異なる文字行が挿入されている。この詩を、縦書きでも横書きでもいいが、3連を並べるとそれこそ一面の菜の花畑が眼前に広がる。どこか遠くで誰かが麦笛を吹いている。空は青く雲雀が囀り、空の上には病的なまでに白い月が光っている。

詩の解釈は別にして、この詩を「見る」と、昔、母が摘んできた菜花としてのカラシナを思い出す。今では菜花と言えばスーパーの野菜売り場に並んでいるが、かつては自分で摘んでくるのが当たり前であった。自分で摘むといっても、一面の菜の花畑は油糧作物としてのアブラナを栽培している畑であるので、そこから勝手に蕾を摘むことはできない。自由に摘んでいいのは川の土手などに群生している菜花のカラシナである。

スーパーで売られている菜花は、蕾の花茎10茎ほどが束にされて売られているが、母が持ち帰ってきた菜花は笹に山盛りであった。母はそれを、炒めたり茹でて御浸しにしたり天麩羅にしたりしてくれたが、ともすると子どもの口には辛すぎて吐き出したりしたものだ。それが大人になってみると、あのツンと来る特有の辛さが何とも言えないアクセントになっていたのであった。

須藤 健一

カラシナはアブラナ科アブラナ属の越年草。全国の道端、川の堤、草原など至る所に生えている。背丈は1m-1.5m。春に開花し、アブラナに似た黄色い花を咲かせる。葉はダイコンの葉に似るが、アブラナでは葉の基部が茎を抱くがカラシナでは抱かない。花弁は4枚で、アブラナでは十字型に広がっているがカラシナではH型のように見える。全草に特有の辛みがあり、古くから香辛料や薬として利用されていた。弥生時代に中国より渡来したとされ、「本草和名」や「和名類聚抄」に「加良之」として記載がみられる。

昨今の河川の堤防を黄色く染めるほどに咲く「菜の花」は、明治以降に入ってきたカラシナの原種で、当初セイヨウカラシナとされたが、今では同じものとされている。

暮鳥が詠った一面の菜の花畑は、アブラナがほとんど栽培されなくなった今ではまず見いだせない。むしろ川の法面に広がるカラシナの方が、一面の菜の花として普通なのではないかと思うのだが。その意味では、冒頭の「なのはな」を「からしな」に替えて、河川法面に繁茂することを考えると斜めに配置されるのが適切なのかもしれない。

